

測量にもとづく登記制度が最初に企図されたのはデルタ東岸の新開地だった。土地争いで生じた社会不安の解消、土地投機のための権利確定の必要性等がその背景だったが、それが最初に行われたのは行政機構の整った旧都アユタヤ周辺だったのは皮肉である。土地投機ブームで自作小農創出策が貫徹できなかったのは、チャクリー改革の矛盾である。

19世紀後半におけるフィリピン糖業

－従属的發展の端緒－ 永野善子

フィリピンは19世紀後半から20世紀前半まで資本主義世界市場の一農業国におしとどめられたが、戦後独立後、先進諸国の新たな経済戦略のもとで従属的な工業発展を開始した。こうした経済構造の変化のなかで、フィリピンの重要な農産物セクターである糖業はいかなる展開を遂げたのであろうか。19世紀後半から現代にいたる約一世紀半のフィリピン糖業を、同国経済における位置、輸出市場・生産形態等の特徴から把握すると、(1)1834年のマニラ開港から1909年のペイン・オールドリッチ関税法(Payne-Aldrich Tariff Act)制定まで、(2)1909年の関税法制定から1942年の日本占領まで、(3)1946年独立からラウレル・ラングレー協定(Laurel-Langley Agreement)が失効した1974年までの三つの時期に区分できる。すなわち(1)イギリスやアメリカそして東アジアを市場とし、外国商会の融資に依存して甘蔗農場が開かれ、小規模な製糖所で含蜜糖が生産された時期、(2)アメリカとの「互惠的自由貿易」のもとで同国を唯一の市場とし、米系資本やフィリピン国立銀行(PNB)の融資によって大規模な製糖工場が建設され、分蜜糖生産が発展した時期、(3)農産物、工業原料輸出の多様化とともに戦前における糖業の卓越的地位が相対的に低下し、1960年代後半以降進展した工業化政策の影響を受けて戦前の古い体質の改善が迫られた時期。したがって19世紀後半をフィリピン糖業の生成期、20世紀前半を発展期、20世紀後半を再編成期として位置づけることができよう。

以上のような展望のもとに本報告では、19世紀後半の世界市場におけるフィリピン糖の位置、糖業の形成に対し重要な役割を果たした外国商会の意義、そして甘蔗農場・製糖所の生産形態について論じ、フィリピン糖業の従属的發展の端緒を浮き彫りにしたい。

西スマトラにおける「強制栽培制度」の意義

大木昌

周知のごとく、西スマトラ州には1847年から1908年までコーヒーの「強制栽培制度」が適用されていた。しかし、その内容がジャワの場合と異なっていた点にも留意する必要がある。即ち、西スマトラ住民はコーヒー栽培を義務づけられたものの、ジャワの場合のように、耕地の一

定割合を政庁によって指定された作物を栽培する必要はなかった。ただし生産されたコーヒーを市場価格よりもはるかに安い固定価格で政庁に引き渡さねばならなかった。市場価格と固定価格との差額が実質的に租税を意味したことはいうまでもない。

ところで19世紀の大半と20世紀初頭にまで及んだ「強制裁培制度」が西スマトラの歴史、特に社会経済史にいかなる影響を与えたかを知るためには、その前後の期間を相当長期にわたって検討する必要がある。本報告はかかる観点から以下の諸点について「強制裁培制度」期の歴史的意義について考える。

- (1) 19世紀初頭における在来産業の水準とその後の衰退
- (2) 本質的に「自給自足 (subsistence) 経済」を維持しつつ収奪することを目的とした「強制裁培制度」のもたらした二面的結果
- (3) 植民権力が既存の社会構造に与えた影響

ジャワにおける植民地官僚制の成立について

白石 隆

報告では、オランダ領インドことにジャワにおける植民地官僚制の成立について、これが、マタラム王国における秩序創出の原理すなわちカウロ・グスティ (Kawula-Gusti) 関係がその精神 (KaséktenとManunggal の観念にもとづく正統性) を欠落させつつ形式的なパトロン・クライアントの関係のみが異常に肥大化することによって成立したということを論じたい。したがって、報告における中心的論点は、(1) プリアイの貴族から官僚への転化とデサの中核農民のシクップ (sikep) からクリ・クンチェン (Kuli kentjeng) への転化の過程 (2) カウロ・グスティ関係を支えたイデオロギー構造 (manunggaling Kawula-Gusti) とこの変質 (とくに hormat の問題) (3) 19世紀末20世紀初頭における正統性の危機の表出状況 (とくに ngêlmu の変質)、の三点である。

ジャワ農村経済史への一視角 - C. ギアツ「農業のインボルーション」 とその批判をめぐって

加納 啓良

「増加する人口と限られた資源のもとでジャワの農村社会は、他のきわめて多くの“低開発”諸国のように大地主のグループと抑圧された半農奴のグループとに両極分解 (bi-furcate) しなかった。むしろそれは、経済的なパイをたえまなくより多くの細片に分割していくことによって、すなわちかつて私が別のところで“貧困の共有” (shared poverty) としてひき合いに出した過程によって、比較的高度の社会的経済的一体性を維持したのである。そこには、持てる者と持た